

はじめに

大山顕

本書は団地が登場するさまざまな作品、なかでもとくに「団地映画」をとおして、社会、風俗、家族、ジェンダー、そして創作などについて語るものである。語っているのは「団地団」を名乗る6人組だ。

いま「団地映画」と言ったが、そのようなジャンル名は聞いたことがないだろう。これはわれわれ団地団が提唱する新たなカテゴリーだ。これによって山田洋次監督の作品もスタジオジブリ作品もアイドル映画も平等に扱うことができる。「名作映画」かどうかは関係ない。団地が印象的に登場しさえすれば、すべては「団地映画」。こういう、一般的な映画批評とは異なる基準を提供するところに団地団の特徴があり、本書のおもしろさがある。

とはいえ、この本は映画批評ではない。言ってしまえば「よもやま話」の記録だ。本書を精読しても、これっぽっちも映画について詳しくならない。団地に関しても同様。団地の歴史や建築的解説などは記されていない。これは「団地映画」をとおして6人が思ったこと・考えた

ことが記された一冊である。そして、同じようなことをみなさんもやってみてはどうか、という提案書でもある。ここで取り上げられる作品を観^みたことがなくてもまったく問題ない。もちろん団地に縁がなくてもだいじょうぶ。気軽に読んでほしい。映画に団地という補助線をひくだけで、こんなにも縦横無尽に語ることができるのか、と驚く（あるいは呆^{あき}れる）ことだろう。よもやま話としてたいへんクオリティが高い。

現在「団地団」のレギュラーメンバーは、脚本家の佐藤大、写真家の大山顕、ライター・編集者の速水健朗、同じくライター・編集者の稲田豊史、小説家の山内マリコ、漫画家の妹尾朝子（うめ）の6人。この並びは「団員」になった順番だ。2010年の暮れに、新宿歌舞伎町のライブハウス「ロフトプラスワン」で前者3人がトークイベントを行ったのを最初に、以降、メンバーを増やしながら現在にいたるまでおよそ50回にわたって不定期に開催してきた。現在のホームグラウンドは阿佐ヶ谷の「阿佐ヶ谷ロフトA」。今後も続けていく予定なので、みなさんぜひ一度足を運んでほしい。

本書の内容は、15年にわたるそこでのよもやま話の集大成としてあらためて催行したトークイベントと、団地団監修の展示「団地と映画―世界は団地でできている」（詳しくは巻末を参照）

を元に構成したもの。つまりベースは6人の丁々発止のやりとりであって、デスクに向かい参考文献にあたりながら執筆したものではない。もちろん書籍化にあたって事実確認を行い、読み物としての体裁を整えてはいるが、打ち合わせなしのトークイベントならではの話題の飛躍としばしばの脱線が本来の魅力だ。そのおもしろさを伝えるため、ときどき会話を再現した段落が挿入される。そこから6人のやりとりの雰囲気を感じてほしい。本書は論文ではないのである。とはいえ語られた内容は斬新で知的なものであると自負している。

そもそもなぜ「団地」と「映画」なのか。団地育ちの佐藤大と、団地を写真に撮り続けてきた大山颯の意気投合によって生まれた「団地団」なので、最初のトークイベントから「団地」をネタにしていたが、「映画」のほうは当初主要テーマではなかった。回を重ね、団員が増えるにつれて、団地が登場する作品、とくに映画について語るようになった。

団地は、その名のとおり多くの住戸が集団になった建築形式だ。それは単に効率を目指したものだけではなく、多くの人々が集まって生活を営む「小さな都市」を目指していた。そんな団地を団地団がテーマにしたのは思いつき・偶然で、考え抜かれたイベント計画の結果ではない。たぶんぼく（大山）以外のメンバーは、正直、団地自体にそれほど深い関心を抱いていな

い。それでも「補助線」として15年間使い続け、いまでも語り尽くせないのは、団地は世界中にある「小さな都市」で、社会や家族を語るツールとしてうってつけだからだ。映画がトークの主軸になっていったのも同じ理由だったといまは思う。商業映画は、基本的には1人では作れない。製作スタッフが大勢必要というだけではない。資金調達、興行は社会と経済に深く関係する。ある意味、団地と映画は似ているのだ。団地が「集合住宅」の一種なら、映画は「集合作品」なのだ。

団地と映画が、歴史上、同時期に誕生・普及しているのは偶然ではないだろう。両者ともに近代の産物である。厳密な「世界初の団地」を言うのは難しいが、現在一般的に想像される団地らしい建築形式の最初、という条件で言えば、とりあえずベルリンのモダニズム集合住宅群、なかでも1910年代に建てられたものを最初とすることができる。最初の映画に関しても諸説あるが、「映画の父」と呼ばれるリュミエール兄弟が1895年12月28日にパリで催した有料の映画上映を「最初」と言うことができる。われわれが「団地」と聞いて思い浮かべる建築も、「映画」と聞いて思い浮かべる上映形式も、どちらも19世紀終わりから20世紀のはじめにかけてヨーロッパで生まれ、世界中に広まった。以降現在まで、社会に欠かせない一種の

「インフラ」として存続している。

だから両者が融合した「団地映画」はおもしろい。「団地映画」というジャンルを提唱できるぐらいの作品数があるのは、団地が社会の一断面を描くのに適しているからだ。あるいは監督にそのつもりがなくても、団地を舞台にすることで自ずと近代以降のわれわれの社会のありようが描かれてしまうから。

いま、「最初の映画」として1895年の上映会を挙げた。実はフィルムを使った映像の鑑賞装置という意味でなら、それより少し前の1891年に特許申請されたものがある。エジソン研究所のウィリアム・K・L・ディクソンが開発した「キネトスコープ」がそれだ。しかしこれは視^{のぞ}きレンズが付いた箱で、基本的に1人で鑑賞するためのものだった。そういう意味では現在多くの映画がスマホで観られるのは、一種の先祖返りと言えるかもしれない。

エジソンではなく、リュミエール兄弟が「映画の父」と称されるのは、映像を「みんなで観る」ものにしたからだ。装置の考案もさることながら、鑑賞形態の発明が重要だったのだ。さきほど製作における社会性を指して、映画は「集合作品」だと言ったが、実は視聴においても映画は「集合作品」なのだ。飛躍した表現をさせてもらえるなら、映画もまた「小さな都市」

なのである。

要するに団地も映画も、空間的な集合がポイント。実は本書の核心も同じである。気のあう友人が集まってあれこれ語り合う。いま、これがとても大切なのではないか、と言いたい。本書はその実践の提示なのだ。団地団は、6人が実際に集まっておしゃべりをするからおもしろい。SNS上ではこうはいかない。あれは「都市」ではない。みなさんも、もっと友達と直に語り合って、できればその喜びをシェアしてほしいと思う。

ともあれ、上映中におしゃべりはできない。作品について友人とよもやま話するのは、エンドロールが終わってから。「おわりに」を読んでページを閉じたら、ぜひ本書に関してもそうしてほしい。

それではショーのはじまりです――。

目次

はじめに 大山顕 3

序章 団地の誕生 15

- 1 団地ってそもそもなに？
- 2 団地での暮らし方、教えます——映画『団地への招待』

第一部 団地はなにを映してきたか？

団地作品12分類（団地団の頭の中）
おもな団地作品年表

第一章 団地映画の誕生と高度経済成長の終焉 1961年

- 1 団地映画の誕生——映画『喜劇 駅前団地』とその時代
- 2 横溝正史は見た！ 団地ができるところを——小説『白と黒』
- 3 変わってしまった日本人——映画『しとやかな獣』
- 4 交通戦争という背景——小説『狂い風』
- 5 団地は「侵略」する側だった——映画『彼女と彼』
- 6 1964年——映画『若草物語』、映画『団地七つの大罪』
- 7 団地妻の憂鬱——映画『団地妻 昼下りの情事』
- 8 役割を終えた団地、そしてマンシヨンの時代へ

第二章 社会のダークサイドの象徴として 1978年

- 1 藤子・F・不二雄作品の高層住宅観——漫画『エスパー魔美』ほか
- 2 一軒家主義者の本音——漫画『ドラえもん』
- 3 スペースコロニー——団地論——TVアニメ『機動戦士ガンダム』
- 4 団地はカッコいい——漫画『童夢』
- 5 家族のすれ違いと団地の間取り——映画『家族ゲーム』

第三章

団地ルネッサンスの夜明け 1994年～

89

- 6 家父長制から「ナウ」の時代へ——漫画『ジオラマボーイ☆パノラマガール』
- 7 安定の時代から「閉塞」の時代へ——漫画『リバーズ・エッジ』
- 8 不幸な団地生活、幸福なアパート暮らし——漫画・映画『無能の人』

第四章

アフター『団地ともお』の世界線で 2003年～

103

- 1 団地パラダイムシフト——漫画『団地ともお』
- 2 韓国には地下室がある——映画『ほえる犬は噛まない』
- 3 団地のなかの青春——映画『ピカ☆ンチ LIFE IS HARD だけがHAPPY』
- 4 団地のなかの経済サークル——小説・映画『みなさん、さようなら』
- 5 団地に侵入するもの——映画『クロユリ団地』、映画『仄暗い水の底から』

6 団地の妖精、樹木希林——映画『海よりもまだ深く』

コラム①

団地と「地霊」の物語 大山顕

133

団地妻と野川

見るための道具

金田一耕助が訪れた団地はどこか

「崖」と「性別」

「道」の地霊が鳥を羽ばたかせる

場所は規格化されない

第二部 団地はなにを作ってきたか？

第五章 団地と女の60年

149

1 規格化される男女

2 主婦と売春

3 小津映画における団地

4 倍賞千恵子作品をとおして見る団地の60年

5 団地が呪縛から解放された日

コラム② 「団地」もまた物語を産み出す「場」——「侵入」と「脱出」 佐藤大

170

そもそも団地も「侵入」者？

団地の新しい「侵入」者たち

「失われていく」団地のなかで……

結界を「脱出」するモノたちの物語へ

コラム③ 漫画「団地で育ったヤバイ私」 妹尾朝子（うめ）

181

第六章 なぜ世界的映画監督は団地で映画を撮るのか

189

映画監督たちは何歳で団地映画を撮ったのか？

監督たちは団地映画を何歳で撮ったのか

団地とつながる宇宙——阪本順治と海外団地映画

団地作品でデビューした監督——ポン・ジュノ、細田守

団地とアイドル映画——森田芳光、堤幸彦

山田洋次と小津安二郎の団地との距離感の違い

子供にしか見えていない特殊能力——『童夢』とその影響

『耳をすませば』における地球屋と団地の対比

震災以後に見えてきた長屋的なユートピア——宮藤官九郎

団地の「バカ」は本当に男の子の独占物だったのか——映画『どこまでもいこう』

韓国の団地と社会を冷徹に捉える——映画『はちどり』

ていねいな暮らしと団地——映画『人生フルーツ』、TVドラマ『団地のふたり』

おわりに 山内マリコ

229

さらに団地について知りたい人のための、団地団おすすめ書籍リスト